

## 地域スポーツ組織の発展の「鍵」に関する研究

——福岡市主婦卓球愛好会の事例——

伊 藤 恵 造\*

(2002 年 10 月 25 日受付, 2002 年 12 月 21 日受理)

### The Key of Community Sports Organization Development

——A Case Study of the Table Tennis Organization of Housewives in Fukuoka City——

Keizo ITO

The purpose of this study was that examination about the key of community sports organization development, by the case study method of the table tennis organization of housewives in Fukuoka city.

The result were summarized as follows:

- 1) The rules and the "Main point of Aikoukai" attained an important part to understand their organization for main members.
- 2) They held their financial resource almost all by a membership fee, and they were aware of their responsibility through a negotiation to a board of education and a newspaper publishing company.
- 3) The reports and letters (and the work to be necessary for that) were attained an important part to communicate each other.
- 4) The study meetings supported their activities widely.
- 5) Their original form of competition "Form of Aikoukai" made chances for housewives to enjoy table tennis, and they became to join "Aikoukai".
- 6) The participation to their community was brought about an social evaluation for them.
- 7) Mrs. Maeda and Mr. Taoka brought the point of view, "community sport as a right" for the members.

**Key words:** Federation of sport clubs, Community sport, Activity in a public hall, Shape of autonomy

**キーワード:** スポーツクラブ連合, 社会体育, 公民館活動, 主体者形成

#### 1. はじめに (研究の目的)

文部省 (現文部科学省) は, 1995 年より全国 6 地域をモデルに指定して始めた「総合型地域スポーツクラブ育成事業」によって, 今日までに多くの総合型地域スポーツクラブ設立の支援を行ってきた。そのうえ, 2000 年 9 月に出された「スポーツ振興基本計画」における「2010 年 (平成 22 年) までに, 全国の各市区町村において少なくとも 1 つは総合

型地域スポーツクラブを育成する」<sup>注1)</sup>という文言を後押しに, ますます, 総合型地域スポーツクラブの組織化は進んできている。

それゆえ, 多くの自治体では, 「どのように『総合型』を立ち上げるか」という話題でもちきりで, 熱心な行政担当者がおらが町の「総合型」育成に力を注いでいる状況が全国に広がっている。しかし彼らの多くは「住民主導」ということの大切さを理解し

\* 日本体育大学体育社会学研究室

つつも、3年間という指定期間の中では「自前でクラブをつくらうなどという意識と住民を育てている余裕などないから、結局住民には熱心に説明して理解と協力を得る」<sup>注2)</sup> ことに取り組むこととなる。既存の競技団体やクラブなどとの関係や、クラブ運営は行政主導でやるのか、それとも住民主体で行うかといういわゆる「上からか、下からか」といった議論があったとしても、結局、指定事業成功の「鍵」は、彼らの「熱意と力量」<sup>注3)</sup> によって左右されてしまうという現状となっている。清水は1987年度から8年間続いた「地域スポーツクラブ連合事業」を行った担当者の「訴え」として、補助事業であることが行政主導と結びついてしまう「課題」を挙げ、そのことが「総合型」においても同じように起っていると指摘している。つまり結局は、『与えられるスポーツ』は自治性を育まないし、スポーツを地域全体の生活課題としてとらえる視野をもたさないから、スポーツ問題の「解決を志向した住民間の共同性は芽生え」<sup>注4)</sup> ず、スポーツ振興にもつながらないのである。

これまでの「総合型」を含めた「先進的」な地域スポーツ組織・クラブの取り組みは、いずれもその地域の土地柄や人材を活かした地道な取り組みによって、その「発展」と結びついている。現在、取り組んでいる各地域の「総合型」担当者が、そうした先進的なモデルにおいて示された「住民自らが手をつなぎ、組織・クラブをつくり上げていく」という「道筋」を明らかにしないまま、「総合型」をやったところで、それが住民のためのスポーツ振興にどのような意味があるのかという疑問を抱え込むことになる。「総合型」の地域定着に関わる課題は、行政担当者や地域住民の声を吸い上げて、その道筋をとともに創りあげていく政策の欠落した現段階では、ことのほか大きいと言わねばならない。このことから地域スポーツ組織・クラブの発展の「道筋」を明らかにすることは差し迫った課題であるといえる。

これまで、日本における地域スポーツ組織・クラブの発展過程については、さまざまな報告によって明らかにされてきた。兵庫県神戸市の垂水区団地スポーツ協会は、1969(昭和44)年に「地域スポーツの『場』を求める住民運動」として、6地区の団地から総勢350人の住民が、野球、バレーボール、卓球の3種目部で参加したことから活動が始まった。

1992(平成4)年の報告では、12部、会員数は2,368名で活動を行っている<sup>注5)</sup>。また、東京都杉並区の向陽スポーツ文化クラブは、1975(昭和50)年にPTAによるプール開放がきっかけとなりスポーツを含めた文化活動を行ってきたクラブである。1995年には、文部省から「総合型地域スポーツクラブ」のモデル事業に指定され、活動を継続している。クラブ結成当初の会員数は700名。それから約20年たった1993(平成5)年現在で、会員数は1,117名となっている<sup>注6)</sup>。東京都の港区自主クラブ連絡協議会は、1975(昭和50)年に港区スポーツセンターで活動する9つの自主クラブが、お互いの発展と向上を目指して結成された団体である。1987(昭和62)年現在で、22団体・会員数2,000名以上を抱えている<sup>注7)</sup>。

これらのいずれのクラブ・組織も、「住民主体」という考えを大切にし、自らのスポーツ・文化活動をよりよいものすることを目指して活動が行われてきている。会員数は1,000名を超え、会長をはじめとした役割を設けて、会の運営に取り組んできている。

その点では、ここで取り上げる福岡市主婦卓球愛好会(以下、「愛好会」)も、会員の手による運営で1,000名を超す会員で活動をし続けていることは共通している。しかしながら、活動の地域が福岡市という大都市でありながら、ほぼ市全域に会員が広がっていること。そして、種目が卓球という単一種目であり、会員が全員主婦であるというクラブ連合組織はこれまでに例をみない。また、各サークルの活動の拠点が公民館を中心としている点や、結成当初から学習会を頻繁に開催してきていることも特徴的である。「愛好会」に関する報告も、歴代会長による報告や厨・大谷ら<sup>注8)</sup>によってなされてきたが、30周年の迎えた段階での詳しい報告はなされていない。

そこで本研究では、公民館活動を中心とした社会教育に関わりが深いと考えられるスポーツ組織である「愛好会」のこれまでの発展の「道筋」を明らかにすることにより、「地域にねがずスポーツ活動」の持続可能な発展の「鍵」について検討していくことを目的とする。

## 2. 研究の方法

### (1) 分析の方法

「愛好会」のこれまでの歩みを振り返るときに、会として1974年から発行してきた「会報」をはじめとする多くの資料の蓄積があることを見逃すわけにはいかない。毎年1回のペースで発行されてきている「会報」や、その後1997年から年6回のペースで発行されることとなった「愛好会だより」等には、発行当時の活動の実態をはじめとして、会員の愛好会に対する考えなどが綴られている。また、会の活動を外部の学習会等で発表した記録なども「愛好会」役員の考えを知り得る資料として参考にした。

その他、資料だけでは不足する点については、元会長の前田恒子さん（以下、前田さん）や現会長の田中理恵子さん（以下、田中さん）をはじめとする役員に聞き取りをすることで補った。

これまでの「愛好会」に関する調査報告は、いずれもアンケート調査によるものであった。今回は、聞き取り調査とこれまでの資料を参考とするという特徴を活かすように、上記のような資料や聞き取りによって得られたものを、なるべくわかりやすくそして正確に表し、その内容をありのままに本文に記述する方法をとった<sup>注9)</sup>。

### (2) 分析の基準

本研究では、森川が試みた「地域スポーツ組織・クラブの発展パターン（試案）」（図1）を参考に分析を行う。この発展パターンは「試案」ではあるが、その妥当性も認められており<sup>注10)</sup>、30年もの間、活動を継続している「愛好会」の歩みを各期に区分けしてみていくことは、1つの「ものさし」として有効な分析方法であると考えられる。

この枠組みでは、地域スポーツ組織・クラブの発展過程を5段階に分け、それぞれ「誕生期」、「成長期」、「第一次安定期」、「発展期」、「スポーツ運動・クラブ連合の段階」としている。地域のスポーツ組織・クラブは、「集団の運営・構造」、「指導のスタイル」、「活動組織の構造（練習組織）」、「活動スタイル」、「運営・指導の要点」のそれぞれの要素において変化を見せながら発展していく。ここでは、各段階において地域スポーツ組織・クラブが発展するために重要となる12項目を挙げている。それらは、「規則」、「大会（事業）参加」、「財政」、「仲間の拡大・P.R.」、「プログラム（事業）」、「ニュース・たよ

り」、「会議（ミーティング）」、「学習」、「他団体との交流」、「白書づくり」、「地域スポーツ計画の作成」、「地域への働きかけ」である。

これらのうち、「愛好会」の活動に見られる項目を検討した結果、①規則、②財政、③ニュース・たより、④学習、⑤他団体との交流の5項目が挙げられた。また、愛好会に特徴的な項目として、⑥研修会と親善大会、⑦指導者の項目をつけ加えた全7項目を分析項目に設定した。

### 3. 福岡市主婦卓球愛好会の発展過程の分析

表1は、愛好会の活動年表<sup>注11)</sup>より、愛好会の活動を年ごと、項目ごとにまとめたものである。また、それと会員数・サークル数・年会費の推移に合わせて図式化したのが図2である。

#### (1) 規則—愛好会規約と愛好会の主旨—

組織・クラブを運営していくためには、組織・クラブの目的や約束事項などを、全体で確認し、明らかにしておくことが大切である。「勝ちたい」、「楽しくやりたい」など、多種多様な会員の目的を実現していくためには、会員間でルールを決め、それに従い活動を行っていく必要がでてくる。会員数の増加に伴い、それらの問題はさらに大きくなることから、組織・クラブ発展のために規則は重要な意味を持つ。しかもそれは、ただ文章が存在するだけではなく、会員すべてが確認をしていなければならないものである。

「愛好会」では、会結成当初の1971年に「福岡市主婦卓球愛好会規約」を作成し、翌年1972年3月15日より施行した。この規約は、総則、事業、会員、役員・評議員、評議員会、名誉会員、会計の7章18条からなるもので、これまでに年会費の変更による改正が6回、役員の選任に関する改正が1回行われてきた。

また、1981年、愛好会10周年を記念する会報第9号<sup>注12)</sup>に、前田さんが書いた「愛好会とは」という8ヶ条からなる文章が掲載される。その内容は次のとおりであった。

#### 愛好会とは

主に公的施設等を利用して、継続的に卓球をしている主婦たちが、生活とスポーツを結びつけながら、より豊かな人間関係を求めて、自主的、自

クラブメンバーの拡大		誕生期	成長期	第一次安定期	発展期	スポーツ運動型へのクラブ自治の確立、協働による成長
大↑組織の規模↓小		創造による成長 ↓ リーダーシップの危機	指導監督による成長 ↓ 自律性の危険 若い	権限委譲による成長 ↓ コントロールの危機 (組織の年齢) →	調整による成長 ↓ 形式主義セクト主義、官僚主義の危機 成熟	?
		未分化非公式	クラブリーダー固定集権的	分権的世話役・リーダー層、係分担、ミーティング	総会の成立 原案提出	新しいリーダー層 連合化への核
		ワンマン的(権威)放任	指揮的	協働的委譲型	「参加」の確立	自治
		未分化(チーム)非公式	キャプテン固定一定の役割分担(技術・コーチ)	班編成(自律性に欠ける)	班競争の導入 クラブとチームの区別 →(自律性出)てくる	枝分かれ 連合化
		命令・服従 自由分散	形式的役割分担(リーダー依存)職能部制	方針・計画 分権的かつ地域別構造	総括準備	総括できる
		技術向上とメンバーの人間関係、楽しさ	一定の規則、約束ごとをつくる、大会参加、財政確立	仲間の拡大、PRプログラムの豊かさ、ニュース便りの発行	学習、他団体との交流	白書づくり、地域スポーツ計画の作成、地域への働きかけ
スポーツの楽しさを味わえる技術能力を育てる	①	○	○	○	○	○
	② 仲間づくり、クラブ組織運営能力		○	○	○	○
	③ 練習計画、指導計画を自分たちで立てる			○	○	○
	④ 外的条件の獲得、克服				○	○

(注) 厨 義弘 日本体育学会第34回大会発表資料(1983)参考  
 (野中郁次郎ほか「組織現象の理論と測定」千倉書房、1978)

図1 地域スポーツ組織・クラブの発展のパターン(森川試案)

発的に活動しているグループの集まりです。

- ・誰からも強制されることなく目的を持ち、
- ・いつでも、だれでも、上手下手なく、楽しい仲間づくりを心がけ、
- ・勝つことだけを目標とせず、上手になるための努力もし、
- ・技術の格差で人間の価値を判断することなく、
- ・一人ひとりの権利を認め、思いやり、考え合うことの大切さを話し合い、みんなで決めたことはみんなで守り、

- ・協力して健康で明るいスポーツ活動を地域に広め、
  - ・人と人との結びつきが豊かに生きる喜びとなるよう、
- 心から願っているスポーツ団体です。

以後、この文章は「愛好会の主旨8ヶ条」として、会報の裏表紙等に掲載されていくことになった。当時会長の前田さんは、この8ヶ条を「10年の経験の中から、ごく自然にできあがった」ものであり、ま

表1 福岡市主婦卓球愛好会の発展の法則性

年	規則	財政	ニュース・たより	学習	他団体との交流	研修会・大会	指導者	大会方式	表彰
1971	規約作成	会費：150 円				第1・2 回親善大会		トーナメント(卓球協会)方式	
1972	規約施行 規約改正	会費：150 円		講習会		第3 回親善大会 第1 回「母と子の1 日卓球」始まる(～1990 年)	会長：前田氏	↓	
1973		会費：150 円		講習会		第4・5 回親善大会	会長：前田氏 指導者との対立 目的の違いから 分裂		
1974	規約改正	会費：200 円	会報第1 号 会報第2 号 会報第3 号から 会報第4 号に配布	講習会		第6・7 回親善大会	会長：前田氏		愛好会方式
1975		会費：200 円	会報第4 号	学習会「社会体育とは」	日中交友会卓球大会(交友会と懇談会)	第8・9 回親善大会(8 回大会から2 日間に分けて開催)	会長：前田氏	↓	
1976		会費：200 円 教育委員会から補助金4 万円・市民体育館使用料2 割減	会報第5 号	講習会 リーダー研修会		第10・11 回親善大会	会長：前田氏		
1977		会費：200 円		リーダー研修会 グループ討議	社会教育全国協議会報告	第12・13 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1978		会費：200 円	会報第6 号、表紙付きで発行	講習会 リーダー研修会		第14・15 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1979		会費：200 円	会報第7 号	リーダー研修会		第16・17 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1980		会費：200 円	会報第8 号	リーダー研修会		第18・19 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1981	愛好会の主旨(8 力案)	会費：200 円	会報第9 号10 周年記念特集号	リーダー研修会	中日友好中国家庭婦人卓球大会	第20・21 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1982	規約改正(会費)	会費：300 円 教育委員会から補助金8 万円	会報第10 号	リーダー研修会		第22・23 回親善大会 会員技術講習会	会長：前田氏		
1983	規約改正(会費)	会費：500 円	記念特集号	リーダー研修会 芝の会発足		第24・25 回親善大会 会員技術講習会	前田氏東京転出 会長：秋吉氏		
1984		会費：500 円	会報第11 号	リーダー研修会		第26・27 回親善大会 会員技術講習会	会長：秋吉氏		
1985	規約改正(会費)	会費：800 円	会報第12 号	リーダー研修会	地域指導者との懇談会	第28・29 回親善大会 会員技術講習会	会長：秋吉氏		毎日新聞社より30 組のカウント表を寄贈される
1986		会費：800 円	会報第13 号	リーダー研修会		第30・31 回親善大会 会員技術講習会	会長：池田氏		
1987		会費：800 円	会報第14 号	リーダー研修会	市民総合スポーツ大会参加	第32・33 回親善大会 会員技術講習会	会長：池田氏		福岡市教育委員会より表彰
1988	規約改正(会費)	会費：1,000 円	会報第15 号	リーダー研修会 パネルディスカッション	婦人スポーツ交流会(福岡市婦人スポーツ活動団体連絡協議会)懇談会 交流会 大野城近隣ママさん卓球大会に招待	第34・35 回親善大会 会員技術講習会	会長：池田氏		
1989		会費：1,000 円	会報第16 号	リーダー研修会 会員研修会	第13 回九州地区社会体育研究会 発表 全国レクリエーション大会	第36・37 回親善大会 会員技術講習会	会長：池田氏		
1990		会費：1,000 円	会報第17 号	会員研修会	とびうめ園地 第45 回国民体育大会開会式(集団演技112 名) シティーマラソン ボランテア 全国身体障害者スポーツ大会	第38・39 回親善大会 会員技術講習会	会長：池田氏	↓	

表1 続き

1991		会費：1,000円	会報第18号 200円	会員研修会		第40・41回親善 大会 会員技術講習会	会長：池田氏		
1992		会費：1,000円	会報第19号 200円	会員研修会	チャリティ募金	第42・43回親善 大会 会員技術講習会	会長：中村氏		
1993	規約改正(会費)	会費：1,500円	会報第20号 200円	会員研修会		第44・45回親善 大会 会員技術講習会	会長：中村氏		福岡県文化功 労賞 社会教 育団体の部 表彰を受ける
1994		会費：1,500円	会報第21号より 形式を一部変更…横書き・行 事毎に発行・評 議委員会の記録を 掲載 200円	会員研修会		第46・47回親善 大会 会員技術講習会	会長：中村氏		
1995	規約改正(複数の 推薦のある場 合は選挙とする)	会費：1,500円	会報第22号 100円	会員研修会	ユニバーシアード福岡 大会：ボランティア  婦人会館文化祭 愛好 会より24年間のあゆ み・会報等を展示	第48・49回親善 大会 会員技術講習会	会長：中村氏		
1996		会費：1,500円	会報第23号より 会報を無料と する	会員研修会	「全国生涯学習フェス ティバル」ボランティア	第50・51回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏		
1997		会費：1,500円	会報第24号 愛好会だより第 1～5号	会員研修会	ユニバーシアードテ ラン ボランティア	第52・53回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏		
1998		会費：1,500円	会報第25号から 製本を業者に 委託「会報とは」 を掲載 愛好会だより第 6～11号発行	会員研修会	身体障害者との交流卓 球大会に参加 動く市長賞 卓球・パレ ーボール・バドミントン の代表21名と長原市長 との懇談会 婦人学習交流会 女性スポーツセミナー	第54・55回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏		スペシャルオ リンピックよ り感謝状を頂 く
1999		会費：1,500円	会報第26号 愛好会だより第 12～17号発行	会員研修会	婦人会館フェスタ'99・ 「愛好会28年のあゆみ」	第56・57回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏		文部大臣賞授 賞式 社会体 育優良団体と して表彰式(東 京)に出席
2000		会費：1,500円	会報第27号 愛好会だより第 18～23号発行	会員研修会		第58・59回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏		
2001		会費：1,500円	創立30周年記 念誌「和と輪」 会報第28号 愛好会だより第 24～29号発行	会員研修会		第60・61回親善 大会 会員技術講習会	会長：田中氏	↓	
2002			会報第29号						

た「楽しい仲間作りを基本として話し合い、学びながら、誰もが平等の権利に目覚め、思いやりを込めて作られた」<sup>注13)</sup>主旨であると記している。

## (2) 財政

### 1) 自主財源の確保

地域スポーツクラブ・組織は、自分たちのために、自分たちの手によって、自分たちが楽しむ活動をするので、活動のために必要な経費は、自分たちで賄わなければならない。しかしながら、実際には、会費の徴収額や納入率などによって、その総額も変わってくることから、財政の確立は、自主的な活動の基礎であると同時に、会員の知恵と力を引き出す厳しさも生み出す面を持っている。

表2、表3には、2001年度の「愛好会」収支の内訳を示した。

収入の部では、会員からの年会費が全体の半分以上を占め、その他主な収入源としては、親善大会その他の大会や各研修会・講習会の参加費がある。また、親善大会には教育委員会から8万円、会員技術講習会にはスポーツ振興事業団から約8万円、第15回市民総合スポーツ大会・第30回個人戦には(財)体育協会より10万円がそれぞれ補助金として支給されており、総額3,276,463円の予算額となっている。

支出の部では、事務所費として、事務所の家賃、光熱、電気、水道などが全体の約2割となっている。また、大会や研修会・講習会の運営費を合わせ

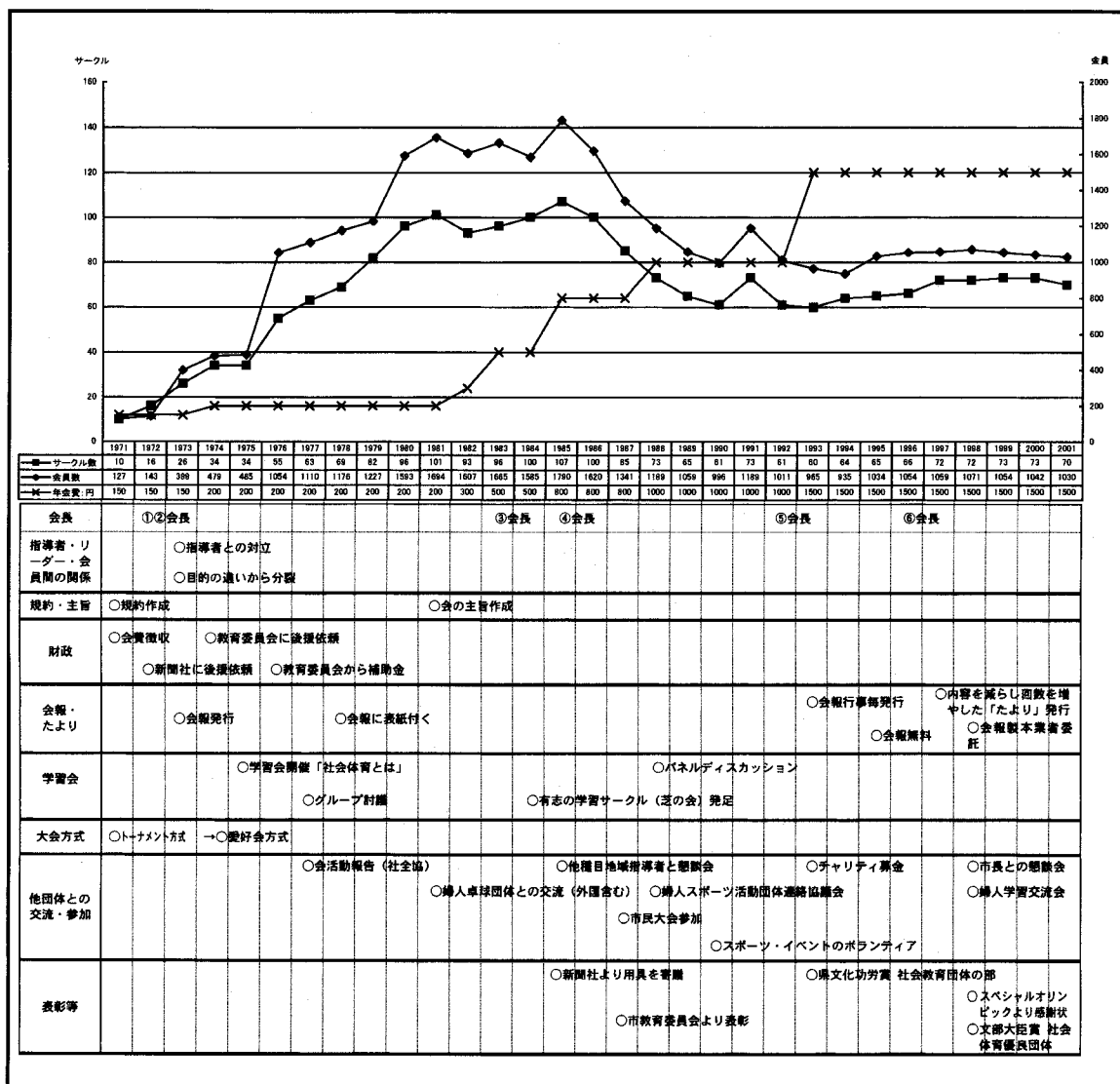


図2 福岡市主婦卓球愛好会の発展パターン

ると47.1%となり、収入の約半分が大会等の運営費に利用されていることがわかる。

また、会員から徴収する年会費は、1972(昭和47)年の会発足当初は150円、1974(昭和49)年には200円に、1982(昭和52)年には300円に、1983(昭和58)年には500円に、1985(昭和60)年には800円に、1988(昭和63)年には1,000円に、1993(平成5)年には1,500円(図1)と変化していった。

このように、「愛好会」の財政は、各会員からの年会費と、親善大会、研修会、技術講習会、個人戦それぞれの参加費という「自主財源」が全体の約9割

を占めていおり、他団体からの補助金についても受け取ってはいるが、決してそれが主要な財源とはなっていない。

## 2) 外部へのPR活動

「愛好会」では、新聞社や放送局、市教育委員会の社会体育課等に後援依頼を行ってきた。

1972(昭和47)年9月、毎日新聞社、RKB毎日放送に後援依頼に出向くが、毎日新聞社側は大会の開催方法について「もっとマスコミを使って人数を増やし、何回も大会をし、実績をつくり、教育委員会に認めさせる方法はどうか。後援を希望であれば

表2 福岡市主婦卓球愛好会 2001 年度収入内訳

項 目	金額	%
繰越金	109,484	3.3
年会費	1,545,000	47.2
春の親善大会参加費	363,000	11.1
秋の親善大会参加費	373,500	11.4
会員研修会参加費	37,500	1.1
会員技術講習会参加費	336,200	10.3
第15回市民総合スポーツ大会・第30回個人戦参加費	148,000	4.5
春の親善大会補助金	80,000	2.4
会員技術講習会補助金	83,160	2.5
第15回市民総合スポーツ大会・第30回個人戦補助金	100,000	3.1
雑収入	99,854	3.0
預金利息	765	0.0
合計	3,276,463	100.0

表3 福岡市主婦卓球愛好会 2001 年度支出内訳

項 目	金額	%
春の親善大会	436,316	13.3
会員研修会	123,123	3.8
会員技術講習会	473,260	14.4
秋の親善大会	359,721	11.0
第15回市民総合スポーツ大会・第30回個人戦	151,967	4.6
平成13年度会報	455,195	13.9
役員研修費	33,722	1.0
諸経費	47,234	1.4
事務所費	613,206	18.7
会議費	197,115	6.0
女性スポーツ活動団体連絡協議会	29,840	0.9
慶弔費	0	0.0
備品費	0	0.0
記念品費	60,000	1.8
ゼッケン作成費	0	0.0
積立金	100,000	3.1
次期繰越金	195,764	6.0
合計	3,276,463	100.0

条件を出してくれ」と愛好会側に伝えた。それに対し、「愛好会」は「後援したからといって、愛好会の運営に口[を=筆者]出さないでほしい。報道も上手な選手中心ではなく、一般を対象にしてもらいたいと申し入れた」<sup>注14)</sup>。

また、市教育委員会へ後援か共催かの依頼をしに行ったときの担当者の発言は次のようなものであった。

「同好会については大変よいことであるからどんどんやってください。卓球協会のやり方とは別に、参加者[を=筆者]主体にした、このような会はよいことだ。あくまで主婦が楽しくやる大会をやりたい。ルールは正規のものでなく、主婦ができるよう

なものにしたい。しかし独自で(教委)大会をする気はない。市がするとすれば卓球協会にさせる。協会に主婦の部を設けるよう指導する。スポーツ教室は今後もつくる。しかし教室が終わり、なお残って続ける場合は、受益者負担で各グループでしてもらおう。その集まりである同好会には後援も共催もできない」<sup>注15)</sup>。

そのような中で、1976(昭和51)年5月12日からフクニチスポーツ紙が「Oh! スポーツ街の選手たち」という特集の中で2回にわたって「愛好会」を紹介した。その記事の中で、市体育課長が当時の状況を次のように書いた。「主婦卓球愛好会は、楽しむスポーツを徹底して追求する。市民スポーツの開



拓者的存在で、大きな問題提起をしてくれた。歴史的な経験からいって、行政の側に市民スポーツに対する十分な理解が行き届かず、期待に応えることができなかった。

その後、同年11月の第11回親善大会より、後援が認められ、教育委員会からの補助金も支給されることとなった。具体的には、補助金が4万円、大会の後援認可後は、市民体育館の使用料が2割減免となった。その後、1982(昭和57)年には、教育委員会の補助金が他の団体との兼ね合いから8万円になり、現在に至っている。その他、1985(昭和60)年には、毎日新聞社から「30組のカウント表」が寄贈され、1987(昭和62)年には教育委員会より、「卓球の普及向上と組織の充実に努められ、本市婦人スポーツの振興に寄与するもの」<sup>注16)</sup>として表彰され、その記念に図案を自分たちで提案決定した愛好会旗が送られている。

以上のように、「愛好会」は自主財源を確保しながらも、教育委員会や新聞社に積極的に後援依頼の働きかけをしてきた。そのような地道な後援依頼等の活動によって後援や補助金が認められることにより、自らの活動が「社会教育団体として位置づけられ、地域住民に開かれた活動でなければならない」ことを自覚し「『スポーツの主人公』にふさわしい力量を持った集団でなければ」<sup>注17)</sup>ならないと感じたことを前田さんは記している。また、「体育館使用料、開催日の優先も受けられ」ることで「社会的にもその活動が高く評価され」ることなど、自分たちの活動の大切さと責任をこの「後援」を期に、自覚していたことがわかる。

### (3) ニュース・たより—会報・愛好会だよりの発行—

ニュース・たよりは、仲間をつくり、育て、会をより発展させるために重要な役割を果たす。自分たちで会を運営していこうという意識や、会員間、あるいは他団体との交流をもつきっかけともなる。また、記録としての役割や自分たちの活動を外部に広めていくのにも欠かせないものであろう。

「愛好会」では、会結成当初から「会報」を発行してきている。1974(昭和49)年1月に第1号、同年10月に第2号が発行されて以降、同年12月に発行された第3号から、「横の連帯をなお—そう計[図=筆者]」<sup>注18)</sup>ることをねらいとして、B4サイズ3

枚の「会報」が会員一人ひとりに配布されるようになった。その後、1975(昭和50)年に第4号(B4サイズ1枚)が、1976(昭和51)年9月に第5号(B4サイズ4枚:二つ折り8ページ)が発行され、第6号からは、表紙付きで編集、発行されるようになった。その後、毎年1回の発行を重ね、第21号からはこれまでの縦書きから横書きに変更し、内容も評議員会の記録などを詳しく盛り込むようになった。第25号からは、前々年まで200円、前年は100円を徴収していた会報を無料とした。1996(平成8)年に発行した会報第26号からは、製本を業者に依頼し、現在、第29号までが発行されている。その中身は、「愛好会規約」から始まって、「愛好会の主旨」や役員紹介、各行事の報告や決算報告、次年度の計画などで構成され、30周年を迎えた第29号では100ページ前後という大変厚みのある「会報」となっている。

また、1998(平成10)年の第26号から、会報の最後に次のような文章が掲載されるようになった。

#### 「会報とは

会報とは、会に関することを報告するために発行する文書、と辞典に載っています。

愛好会では各サークルの代表者が評議員として会合に出席し、会の運営について話し合います。特に行事の前後には会員の要望を持ち寄って、いろいろな事項について定まりをつくっていきます。それを会員に伝えていく、そういう大事な役割を持っております。それでも全会員に話が伝わらないことが多くありました。

そこで会報を発行することによって、愛好会の主旨や、年間行事、研修会の報告のほかに、諸先生の励ましや教訓、先輩の言葉や皆さんの声も載せて、自分たちでつくり上げていく会ということをしてPRしています。その他に、組織の存在を社会に認めてもらうという大事な要素も含まれております。記録として残しておく会の財産でもあるのです。(前田恒子)」

また、「愛好会」では1997(平成9)年の5月より、評議員会や活動の様子を速報性をもって会員に伝える広報紙として「愛好会だより」(B4サイズ・両面・1枚)を年に6回のペースで発行を始めた。

この「愛好会だより」は、「サークル活動において仕事を持つ人や、介護などにかかわる人が増え、休みがちな方に対する会の活動への理解浸透を考え」<sup>注19)</sup>、発行することとなった。内容は、その時に行われた評議員会や研修会などで話し合われたことなどを中心に構成されている。

このように、「愛好会」では、1973年という会結成からまだ間もない時期から、会報を発行してきた。その内容も、会の状況に合わせて変え、新たに「愛好会だより」を発行するに至った経緯も特徴的といえる。

また、現会長の田中さんによれば、会報第27号より、印刷を業者に任せるようになったものの、依然として、編集・校正作業は12名の役員を中心としたメンバーで行われており、この作業に取り組むことが、役員相互の理解等、コミュニケーションの場となっていたという。

#### (4) 学習—学習会と芝の会—

会員がみんなで実践していく集団として力量を高めるには、クラブ自身で新しいリーダーを育てていく学習の「場」が必要となる。「学習会」に抵抗なく参加できる場となるためには、学んだことが活かせる実践の場が用意されていることが重要であり、そのテーマ決定にあたっては、会員の考えや悩みなどをしっかりと把握していなければならない。

##### 1) 学習のスタイルと内容

「愛好会」では、1975(昭和50)年に「社会体育とは」をテーマに初めて学習会を開催してから、今日まで、講習会〔1972(昭和47)年～1978(昭和53)年※学習は1978(昭和53)年のみ〕、会員指導者講習会〔1996(平成8)年～2000(平成12)年〕、リーダー研修会〔1976(昭和51)年～1989(平成元)年〕と名前を変えながら、現在では会員研修会(1989(平成元)年～)通常年2回ペースで学習を行っている。

図3は、これまでの学習会の内容をテーマ別に示したものである。図が示しているように、主にグループ活動や組織に関して、あるいは研修会の位置づけや総括の必要性などについては、かなり熱心にテーマとして取り上げてきている。また、リーダーや評議員の役割に関することなど、各サークル、あるいは愛好会の内部だけの問題にとどまらず、「主婦・婦人・女性」がおかれている状況や、公民館主

事の問題等も含めた社会的な問題にまで学習の幅を広げていることは特筆すべきことである。

また、会が特に学習を進めてきたのは、卓球に関するルールや用具、さらには大会運営についてである。1997年(平成9年)4月に福岡県体育協会より「異質ラバー規制」<sup>注20)</sup>の通達を受けてから、愛好会では「今後、愛好会の大会での(異質ラバーの)使用をどうするか」の検討を始めた。各サークルから意見を聞き、評議員会で討議、さらにアンケート調査を実施し、各指導者からの助言も取り入れた。その結果、「異質ラバー」を使用していたのが、当時の会員全体のわずか7%(77名)でありながら、「愛好会の主旨の自主活動(自分の意志で選択する)を大切にし、規制をするということではできるだけ避けたい」との考えから、「勝つために容認するのではなく、卓球を楽しむために認める」という結論に至った<sup>注21)</sup>。

リーダー・会員研修会の1つの特徴といえるのが、1977年から行われているグループ討議である。元会長の前田さんによれば、ここでの討議が、数多くのテーマを会員が理解することに役立っており、特に、メンバー一人ひとりに発言の場を保障すること、そして、メンバー全員が自分の言いたいことをまとめて話をするを学ぶ場ともなっているという。その後、1988年には、「愛好会」の会員や指導者等でメンバー構成されたパネルディスカッションも行われている。このディスカッションでは、指導者と会員のそれぞれのお互いに対する要望や質問などがテーマとして設定されていた<sup>注22)</sup>。

さらに、1983年(昭和58年)9月、これまで「愛好会」の年間行事として1975年(昭和50年)から続けてきたリーダー研修会を「もっと充実させたい、自分たちのものにしたいという仲間が集まり」、「芝の会」が発足する<sup>注23)</sup>。「芝の会」は、「愛好会」会員の中の有志で構成される自主サークルで、「日本女性史」や「近代日本史」等をテーマに、月1回、市立婦人会館で学習会を行っている<sup>注24)</sup>。この「単に卓球だけに留まらず、何か意義ある学習会を」<sup>注25)</sup>というメンバーの想いが、さらに幅を広げたテーマを掲げる学習会の活動を継続させていくこととなったと推察される(表4)。

##### 2) 活動の支えとなった学習会

「やれるものならやってごらん」と設立時の指導者から突き放された「愛好会」は、「協会の傘の下に

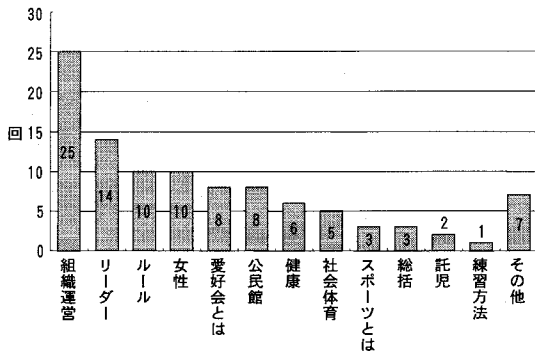


図3 福岡市主婦卓球愛好会リーダー・会員研修会テーマ

入らなければ組織も認められないという行政の壁<sup>〔注26〕</sup>の厚さを実感することとなる。市体育館や社会体育課へ後援願いと補助金申請に行った際も全く相手にされなかった。交渉にあたった前田さんは「できることなら逃げ出したいと思うこともたびたびであった」<sup>〔注27〕</sup>と当時を振り返りながら、この当時に自分自身を支えていたものは「私たちがたいなものにまで強い力で押えこもうとする行政や権力への怒りであり、抵抗であった」<sup>〔注28〕</sup>と記している。

このころからその「厚い壁」を打破する「力をつけるために学習の必要性を痛感」<sup>〔注29〕</sup>し始め、これまで技術指導が中心であったリーダー研修会等の中身にも学習が組み込まれるようになった。その内容は、公民館で活動をしているサークルということもあり、「地域に根づいた『生活卓球』を目指してきたことから『公民館とは私たちにとって何なのだろうか』ということを一貫して取り上げてきた」<sup>〔注30〕</sup>。このような学習会を田岡さんらの助言を受けながら毎年積み重ねていく中で、「愛好会」のメンバーは「鍛えられ」<sup>〔注31〕</sup>ていったと前田さんは綴っている。

また、ある研究会で前田さんが発表した資料によると、研修会等において、社会教育法やスポーツ振興法についてふれたことで、「『権利』についてや『自主的・自発的活動』は国によって保証されていることを学び」<sup>〔注32〕</sup>それが公民館等への活動場所確保のための交渉や、行政等からの後援、援助金の確保に役立った。さらには、指導者の問題をはじめとする「愛好会」の「内的な問題の数々を自分たちのものとして話し合える集団に育っていった一つの大きな力やはり、リーダー研修会であった」と前田

さん自身が記しているように、各サークルのリーダーたちが「サークルの問題点や悩みをお互いに持ちより共に考え、話し合っていく」など、この研修会が幅広い意味で「愛好会」の活動を支えていたことがうかがえる。

#### (5) 他団体との交流

「自分さえスポーツできればいい」という考えからは、地域における自分たちのスポーツ条件を満たすことはできない。会員数の増加や事業内容の幅の広がりによって、会として地域の他団体との関わりを持たざるを得なくなってくる。このことを通して、会員一人ひとりに、自分たちの活動が多くの人々によって支えられているのだということを知る機会ともなろう。

1975年に日中交歓卓球大会において、交歓試合と懇親会に参加、そして1977年、社会教育全国協議会福岡集会において「愛好会活動の実践記録」<sup>〔注33〕</sup>を報告して以来、「愛好会」では他団体との交流を重ねることとなった。

1981年には、中日友好中国家庭婦人興球隊との交流を行い、また、その後には、他種目の地域指導者との懇談会や市民大会への参加、スポーツ・イベントなどのボランティアを行ってきた。

さらに、1988年からは、福岡市の家庭婦人バレーボール、家庭婦人バドミントンとともに発足させた婦人スポーツ活動交流会（のちに、婦人スポーツ活動団体連絡協議会と改名した）として、活動してきている。その他、チャリティ募金や市長との懇談会なども行ってきた。

また、他団体からの表彰等に関しては、1987年に福岡市教育委員会より表彰を受け、1993年には福岡県功労賞社会教育団体の部を受賞、さらに、1998年には社会体育優良団体として、文部大臣賞を受賞した。

以上のように、「愛好会」ではさまざまな団体に参加し、交流を図ってきた。特に、30周年を迎える今日に近づくにつれて、会の活動に他団体と関連した活動が増加してきている。さらに、その活動の拡がりとともに、「愛好会」は他団体より評価を受けることとなった。「愛好会」は、単なる「卓球」をやるだけの会におさまることなく、積極的にボランティアなどの地域の行事に参加していくことで、教育委員会などからの後援や補助金などに対する責務を果た

表4 「芝の会」のこれまでのテーマ

年	月	テーマ
1983	9	私たちにとって学習とは
	10	教育とは何か (教育基本法)
	11	"
1984	1	教科書について
	2	学習グループ交流集会 (婦人会館主催) に出席
	4	婦人が学習するということ (姿勢、継がり)
	5	主婦として、女として、母親として自立態勢がどれだけでできているか
	6	事例研究
	7	臨時教育審議会について
	9	日本の教育について考える
	10	今の学校教育のどこに欠陥があるか
	11	いじめの原因は何か 親との関係
	12	新聞の記事の中から 自分史を書こう
1985	1	学校とは何か
	2	学校の歴史
	3	学校と家庭教育の歴史
	4	日本の教育のたてまえと現状
	5	学校の改造の試みについて (干溝小の例)
	6	干溝からの手紙をもとに戦後の40年間の教育
	7	PTAを考える
	9	PTA新聞の役目
	10	PTAの予算
	11	地域の活動
1986	1	～5 主婦と女・女の自立
	6	～10 ボルトマン「人間はどこまで動物か」
	11	～12 日韓の歴史と問題
1987	1	～3
	4	地域スポーツのあり方
	5	～7 公共施設の利用について
	9	同和問題を勉強する心構え
	10	～12 同和の歴史・同和の今後のあり方
1988	1	仮設の揺籃
	2	自由主義と社会主義
	3	能力別クラス編成について
	4	～5「さいはての社会教育」福岡型公民館 社会教育の将来
	6	菊田事件について
1989	4	～1990.3 井上清著「日本女性史」時事問題・消費税について・参議院選挙
1999	4	コソボ、ユーゴ問題
	5	～7 介護保険について
	8	戦争を考える
	9	～10 日本近代女性史 1900年から100年間
	11	「経済新生対策」について
	12	1999年を考える
2000	1	「芝の会」について
	2	東京都 外形標準課税
	3	公民館実践フォーラム
	4	それぞれの規制緩和
	5	17歳の事件 少年法改正
	6	6.19 平和の集い 日本国憲法を考える
	7	雪印、そごう問題
	8	戦争責任問題について
	9	新自由主義とは何か
	10	社会保障を考える
	11	90年代の日本経済と暮らし
	12	教育基本法
2001	1	学習とは?
	2	教育改革
	3	市民センター 区行政移管について

し、社会的な評価を得ていったと考えられる。

#### (6) 研修会と親善大会

##### 1) 技術水準に見合った技術研修会と親善大会の開催

1972 (昭和 47) 年に「第 1 回講習会」として、高校生を呼んで技術指導を受けてから、「愛好会」では、1976 (昭和 51) 年からの「リーダー研修会」、1977 (昭和 52) 年からの「会員技術講習会」において、さまざまな内容で技術研修会を行ってきた。

「愛好会」の技術研修会の特徴の 1 つとして、「上級・中級・初級」というようにクラス分けをして、しかも日程を各級ごとに別につくっていることが挙げられる。これによりすべての参加者に練習の時間を保証することができる。

また、それと同時に、発足当初から指導に当たっている小園江さんを見た森川さんは、「初めてする人の気持ちになって、その人たちのいろんなものをつかみながら、わかりやすくかみ砕いて説明しながら 1 つの理論を持って」指導しており、そのことが「主婦が楽しく続けて」いくことを保証することにつながっているのだという感想を残している<sup>注34)</sup>。

また、「愛好会」では、毎年、春と秋の年 2 回のペースで、親善大会を行事として行ってきた。その記念すべき第 1 回の結成記念大会 (1971 年 11 月) には、10 公民館、23 チーム、127 名が参加した。その翌年の 5 月には第 2 回大会が行われたが、すでに参加者数は 14 公民館、29 チーム、143 名と増加の傾向を示している。

その後、親善大会は 30 周年を迎える中で 60 回開催されているが、その参加チーム数および参加者の推移を示したのが図 4 である。図のように、第 1 回大会では 23 チーム、127 名の参加で行われ、その後 1983 (昭和 58) 年に行われた第 25 回大会では、280 チーム、1,310 名の参加となった。現在は、200 チーム、900 名前後の参加となっており、先に示した「愛好会」の会員数・サークル数とほぼ同じ増減の傾向であることがわかった。

田中さんによれば、親善大会に参加し、「最初は『からだを動かすのって楽しいな』というような安易な楽しみから入会し、しばらくたってから『愛好会』のよさがわかる人もいれば、逆に退会する人もいる」という<sup>注35)</sup>。親善大会に参加するためには会員登録をする必要がある現状では、新会員は、その

後会員になるにしてもそうでないとしても、この親善大会を必ず経験することとなり、その点で会員確保のためにこの親善大会の持つ意味というのは非常に重要であると考えられる。

1974 (昭和 49) 年より、会の方針として「勝つことだけを目標としない仲間づくり」が打ち出され<sup>注36)</sup>、「愛好会」独自の大会方式「愛好会方式」が生み出された。この方式は約 1,300 名の主婦たちが参加し、満足のできる大会を目指して考えられたものである (表 5)。表のように、参加者はまず技術に応じて 1~15 パートに分けられる。1 チーム 4~6 名で編成するチームに所属し、それぞれダブルスとシングルスで 4~6 試合行う。その結果により、各自属するパートが上がったり下がったりする。この方式により、技術差は関係なく、みんなが一定の試合数、同じレベルの相手と卓球を楽しむことができる。

##### 2) 「愛好会方式」の確立

公民館から育った「愛好会」の運営は、卓球というスポーツと接点を持つ中で、会独自の活動スタイルを築き上げていった。

「スポーツさえできればいい」というような考え方を持つ会員や「あまり難しいことは言うな」という考えの指導者が少なからず存在した頃から、その「愛好会」のスタイルづくりは始まっていった。そしてやがて、会独自の大会運営方式「愛好会方式」がつくられることとなる。

それまでの親善大会は、大会が終わると「勝ち負けだけが反省の話題になり」お互いの関係を悪くする話を中心であった。そのときに「なんのための親善大会か」ということを考え、この大会が「日頃の練習の成果を発揮する場として」<sup>注37)</sup>重要な意味を持っていることを確認する。そこで大切にされている考え方としては「相手が強ければ負けるし、弱ければ勝てる、強い相手に自分の技量がどれだけ通用するのか自分なりの点数をつけて、思い切りぶつかってみる、その点数に近づいていたらこの勝負は勝ちである」というものがあった。このような考え方が、勝敗にこだわる人たちの価値観を変え、ゲームに望む姿勢などにも影響を与えることとなった。

それらの考えを活かすための「愛好会方式」は、「誰もが楽しく、平等に参加できる大会」として現在まで行われてきている。大会日程の都合上、「下手な

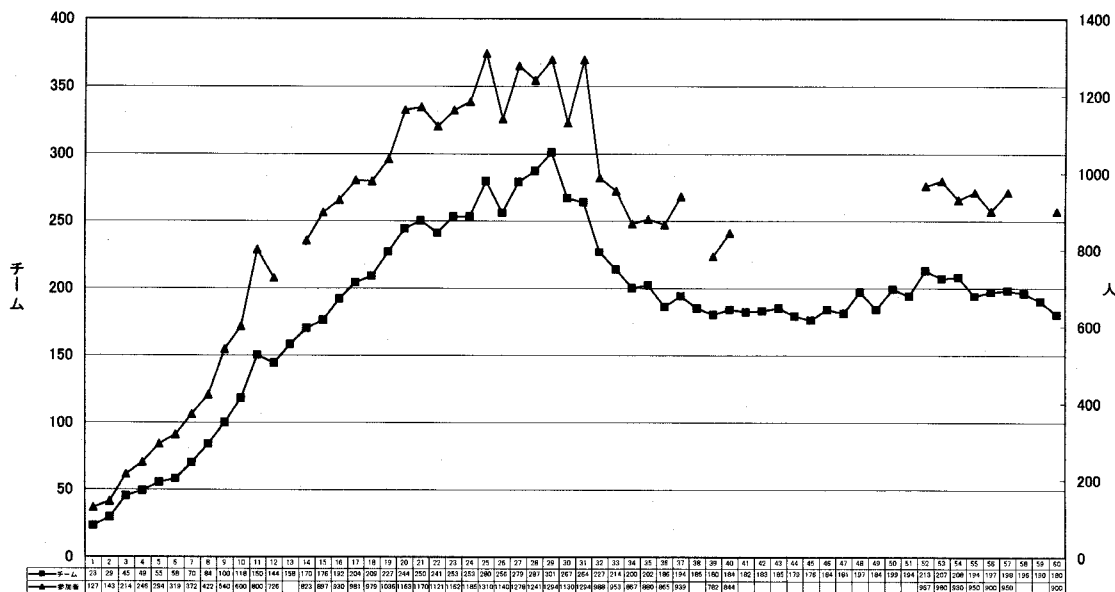


図4 福岡市主婦卓球愛好会 親善大会参加チーム数と参加者数の年次推移

人、弱い人」は出場できないこともあるという地域や卓球協会主催の大会方式をまねすることなく、大会を行う3日間の日程の中から各自が好きな日を選ぶことができ、その準備も審判もすべて会員でやっており、やがてこの大会方式が、地域の大会の中でも使われていくようになった。

また、このような「誰もが楽しく、平等に」という考え方は技術研修会においても反映され、その内容も会員の要望に沿って変え、各会員の技術レベルに合わせてそれぞれ日程を組み、目的に応じた練習に取り組めるようになっていく。

#### (7) 指導者—指導的役割を果たした二人の存在—

「愛好会」では、初代会長から現会長まで、全部で6名が会長を務めてきた。その中で、12年間という約半分の期間を会長として会に関わり、特にその立ち上げから発展へと向かう時期に務められた前田さんと会との関係は非常に深いと考えられる。なかでも、前田さん自らが記しているように、1973（昭和48）年に起こった「指導者との対立」と会員の「分裂」<sup>注38）</sup>を乗り越え、会長として会を導いてきたことは「愛好会」の発展にとって大変重要なポイントであったと考えられる。また、その前田さんが「愛好会」発足以前から公民館活動において交流していた田岡鎮男さん（以下、田岡さん）の存在についても、

ここでふれておきたい。

#### 1) 前田恒子さんの存在

1969（昭和44）年3月、前田さんは福岡に居を構えることとなった。夫は仕事に多忙な毎日過ごし、子どもたちも新しい友人と新しい生活を楽しむようになり、自分だけが一人取り残されていると感じ、同年10月に福岡市教育委員会の公募した婦人学級に席を置くようになり、公民館との関係を持つようになる。

初代会長がわずか15日間で転居して以来、12年間、「愛好会」の会長を務めてきた前田氏は、この公民館との関係の中で、自主学習グループの仲間や、他のグループとの合同学習の中で多くを学んでいった。「葦の会」という学習グループにおいて、社会教育の原点である自主的な自己教育・相互教育を学び、また、学習者の主体的・自発的な意志に基づく運営方法も身に付けていった。

前田さんが会長を務めた1972（昭和47）年から1983（昭和58）年という期間は、「愛好会」にとっては、会員数等の増加に見られるように、会の規模が拡大していった期間であった。その活動のきっかけとなった公民館主催の卓球教室終了後、卓球を続けたいという主婦たちが集まり、サークル活動を続けていたが、その当時はスポーツ振興計画や政策も今日と比べて比較にならないほど貧弱で、指導者も

表5 愛好会方式（チーム戦、リーグ戦）

組 合 せ					特 徴 と 理 由
<div>1. 1 チーム、4 人から 6 人で編成。</div> <div>2. 技術に応じてランクがつけられる（サークル内の話し合いで決めている）1 パートから 15 パートに分けられる。</div> <div>3. 1 パート 5 チーム編成で 4 チームと対戦する。同レベルが集中した場合 5～8 チームになることもあるが、いずれも 4 試合。</div> <div>4. 上位入賞の場合はランクがあり、最下位や得点が少ない場合は下にさがる。</div>					<div>1. サークル会員の編成しやすい人数。</div> <div>2. 同じレベルの対戦が楽しいから、15 パートは初参加の初心者で組まれることが多い。</div> <div>3. 待ち時間を少なくして、参加者全員が同じ回数で出場する方法が取られ、4 試合が手頃。</div> <div>4. 得点によってパートがあがったりさがったりする。</div>
試 合 形 式					<div>1. ダブルスを一番に持ってくると緊張がとける。</div> <div>2. 上手な人だけが何回も出ることのないよう誰とでも組める練習は、チームの和が図れる。</div> <div>3. 取決めがないと、片寄った出場をしてしまう。オーダーを作るとき間違った組み方をしてしまうため、目安として、プリントして配っている。</div>
<div>1. 1 ダブルス、4 シングル。</div> <div>2. ダブルスはチームの中で、必ず相手を変えて 2 回までとする。</div>					
試合数		出場回数（4 試合の時）			
S	W	4 人編成	5 人編成	6 人編成	
16	4	②+④=4 人	②+③=3 人 ①+④=1 人 ①+③=1 人	①+③=4 人 ②+②=2 人	
順 位 の 決 め 方					<div>参加者が最後まで試合をすることが目的で、得点の計算は最終試合の 1 点まで評価の対象となることで 1 点を大事にする心を養うため。</div>
<div>1. 勝点で決める。</div> <div>2. 同点の場合は勝セットで決める。</div> <div>3. 勝セット数も同じ場合は負けセット数が少ない方が勝となる。</div> <div>4. 勝セット数も負けセット数も同じ場合は対戦相手で決まる。</div>					

仲間もいないといった状況であった。卓球経験もなく初心者であった前田さんは、自分自身の技術を身につけながら、指導者を探し、やがては自分たちの仲間から指導者を出せるようにし、仲間（会員数）を広げていった。

さらに、「昼間から子どもを放り出して、女どもが何をやっとな。よっぽど暇な連中の集まりであろう」という当時の女性に対する差別的な考えが強い雰囲気の中で、主婦たちがこのような活動を継続させていくなかで、会結成当初の会自体が未成熟と思われるその時期に、リーダーとして果たした前田さんの役割は大きかったと推察できる。このことは、会員自身が日常の活動や大会等に参加している間の子どもの託児についても、学習を重ねるうちに、託児係を設けることとなったことからもうかがえる。

また、前田さんは、会長を退き東京に移転した後も、会主催の研修会や会報などにおいて、長年にわたり、「愛好会とは」というテーマで会結成前や当初

の様子を伝える講演や投稿を行ってきた。

このような前田さんの取り組みは、前田さん自身が記しているように「公民館との出会い」<sup>注39)</sup>が非常に大きく役立てられていたことが推察される。この「公民館との出会い」の中で、公民館主事の田岡さんとの「めぐり合わせ」も、前田さんそして、「愛好会」としては重要なものとなったと言える。

## 2) 前田さんを支えた公民館主事・田岡鎮男さんの存在

田岡さんは、1955（昭和30）年から1982（昭和57）年まで福岡市の公民館主事をしていた。

1970（昭和45）年度の公民館主催の婦人学級終了後、自主的に組織されたサークル「葦の会」において、前田さんと田岡さんは出会うこととなる。前田さんはこの「葦の会」の代表という立場を持ちながら、「愛好会」が結成される。

田岡さんは「愛好会」が年1回開催するリーダー研修会に呼ばれ、「ある時は公民館問題、ある時は婦

人と学習時間などについて」<sup>注40)</sup>話をしている。「愛好会」では、この研修会に各サークルの代表を集め、その話をそれぞれの「母胎のサークルに注入」<sup>注41)</sup>していくことを狙いとしていた。田岡さんは、この研修会において「常に100名を超える参加者一単位サークルから選ばれた指導的役割の主婦たち一を前にして、果たして何人の参加者が私の理論を理解し、それがどのような経路をたどって」<sup>注42)</sup>各サークルに広がっていくのかを気にしながら話をしていった。

その他、田岡さんは、「市への補助金要請についての初歩的段階でのお手伝い、市卓球協会の無形の圧力をね返すためのてだてのあり方、スポーツ行政との関係等々」<sup>注43)</sup>を通じて「愛好会」とのつながりを強めていく。

しかしながら、田岡さん自らも記しているように、これらの取り組みは、前田さんが「葦の会」における学習エネルギーの反芻と、『愛好会』へのエネルギー転化という循環作用を、意識するとしなやかにかかわらず持続していったこと」<sup>注44)</sup>が、その力を生み出したと言える。そして、その背後には、学習会等を通して様々な助言をした田岡さんの存在があった。前田さんの言葉にあるように、「まさに『風にそよぐ葦』のように、たえず揺れ動く私たち（愛好会＝筆者）の舵とりをしてくださった」田岡さんと「愛好会」との「両者の相互関係の基底には、常に権利としての社会体育という基本的理念が根を張っていた」<sup>注45)</sup>し、この「権利としての社会体育」という視点を田岡さんが持ち合わせていたことが、当時の「圧倒的男性優位」<sup>注46)</sup>な社会の中で「愛好会」がその基礎を築くことができたと考える。

田岡さん、そして前田さん、そして「愛好会」のメンバーと、これらの関係の中で「愛好会」の活動は軌道に乗っていったということは、前田さんが「卓球など全くやったことのない自分が会長まで引き受けてやってこられた」<sup>注47)</sup>理由として、公民館の学習仲間と「愛好会」の役員をはじめとする卓球仲間のおかげであることを挙げていることからもうかがえる。

#### 4. おわりに（結論）

1) 福岡市主婦卓球愛好会の発展条件について  
本研究では、公民館活動を中心とした社会教育に

関わりが深いと考えられるスポーツ組織である「愛好会」のこれまでの発展の「道筋」を明らかにすることにより、「地域にねざすスポーツ活動」の持続可能な発展の「鍵」について検討していくことを目的とした。

①規則、②財政、③ニュース・たより、④学習、⑤他団体との交流、⑥研修会と親善大会、⑦指導者の7項目の要素から検討してきた結果、「愛好会」発展の「鍵」として、以下の7点を析出することができた。

①会結成の早い時期に作成・施行された「規約」と、わかりやすい文章でつくられた「愛好会の主旨8ヶ条」が、「愛好会」についての役員を中心とした主要メンバーの共通理解を図っていくことに重要な役割を果たしたこと

②会の財源の約9割を年会費と大会等参加費で確保し、また、教育委員会や新聞社への後援依頼等の取り組みにより、役員自身が自分たちの活動の大切さと責任を自覚したこと

③会結成の早い時期から発行されている「会報」および「愛好会だより」が、多くの会員への伝達手段として、また役員などの考えを伝えていく手段として大きな役割を果たし、また、会報作成の作業そのものが、役員相互の理解など、コミュニケーションの場となっていたこと

④学習会が「愛好会」の内的な問題の数々を自分たちのものとして話し合える集団に育っていった1つの大きな力として機能し、サークルの問題点や悩みをお互いに持ちより共に考え、話し合っていくなど、幅広い意味で「愛好会」の活動を支えていたこと

⑤「愛好会方式」の導入が「スポーツの中に平等を取り入れ」、多くの会員である主婦にスポーツを楽しむ機会を与え、やがては会員として日常的な「愛好会」の活動に加わっていくきっかけとなったと考えられること

⑥積極的にボランティアなどの地域の行事に参加していくことで、教育委員会等からの後援や補助金などに対する責務を果たし、社会的な評価を受けていくこととなったこと

⑦公民館活動を通じて出会った前田さんと田岡さんが、学習会等に「権利としての社会体育」という視点をもちながら、会員一人ひとりに接し



ていたこと

## 2) 地域にねざしたスポーツクラブ発展の「鍵」について

「愛好会」では、現在に至るまでにさまざまな活動を行ってきたが、そのエネルギーの源は、やはり学習会を通じた学習と話し合いの訓練であったと考えられる。さまざまな考えや要求を持つ会員たちの意見を、どのようにしたらまとめていくことができるのか。その方法を長年の学習会におけるグループ討議や評議員会で経験をし、学んできたと考えられる。つまり、一人ひとりの声を大切にする姿勢とそのシステムをつくり上げ、そしてそれを実践するスタイルを創り上げてきた。公民館における社会教育と卓球というスポーツとの接点として「『勝つ』ことだけがすべてではない」<sup>(注48)</sup>大会方式として「愛好会方式」を生み出した「愛好会」は、当時から今日までなお中心的な考え方であると思われる「勝敗重視」のスポーツ界において「楽しむスポーツ」を追求し、「スポーツの中に平等を取り入れた」ということができよう。このことが、多くの会員である主婦にスポーツを楽しむ機会を与え、やがては会員として日常的「愛好会」の活動に加わっていったと考えることは、決して不可能なことではないであろう。

また、このことからわかるように、「愛好会」がこれまで歩んできた道のりは、決して「右肩上がりの直線的」なものではなかった。指導者や財政面等、いくつかの問題を抱えながらも、自ら話し合いをもち、自分たちの力でそれらを乗り越えてきた。

さらに、「愛好会」の特徴として、単なる「スポーツ」の団体ではなく、その地域、あるいは会員の生活すべてを含めてともに学び、戦ってきた組織であることをここで挙げておきたい。清水<sup>(注49)</sup>が「スポーツを通じて醸成された連帯意識や自治意識が、他の生活局面に拡大・波及したり、地域社会で活動するスポーツ以外のグループ・団体との接触を通して、地域内の和の中に入り込むことで、他の生活課題と（スポーツが：筆者）同次元に位置づけられることが必要である」と言っているが、まさに「愛好会」はその言葉を実践したかたちとなっている。それは森川が主張してきたように、「スポーツと地域・生活の関係は、地域のスポーツ活動が存在し継続可能な条件、すなわちスポーツを支えている土台である地域そのもの、そして住民の生活の豊かさを

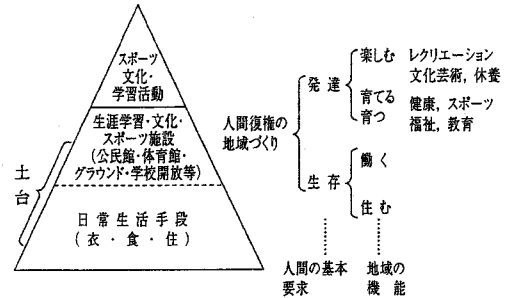


図5 地域スポーツの土台  
(海老原治善『生涯学習』（府中市）)

前提にしている」<sup>(注50)</sup> こととも一致している（図5）。

そのようにスポーツと地域・生活をとらえようとするときに、実際に「愛好会」においてはどのような方法がとられていたのか。それは会発足当時の男性中心の考え方の中で、田岡氏が「このような個、または単位サークル活動の思考のひ弱さを、組織的な紐で結び付け、強靱な“女の自主性”という1本の根太い束にしていくところに」、「愛好会」の「重要な存立価値」を認めているように、「時と所を問わず、日常的に継続的に、相互に話し合い、評価し合い、語り合うこと」であった。そして、田岡氏がこれからも引き続きそれらの必要性を訴えているように、これまでの主婦や女性のみならず、スポーツ団体そのものの置かれている状況を考えれば、このような地道な取り組みがその組織・クラブの原動力となっていくということを、「愛好会」のこれまでの30年間で示しているのではないだろうか。

ここ数年、文部科学省が地域スポーツ政策の「目玉」として取り組んできた「総合型地域スポーツクラブ」の運営状況は、熱意のある担当者や補助金等により、かなりその活動が左右されているのが現状である。「うまくいく」ところは、右肩上がりの直線的に発展し、ダメなところは補助金ができる3年間で終わってしまえば、パタッとその活動を止めてしまう。そのような状況の中で、考えなければならない問題は、「総合型地域スポーツクラブ」をどのように立ち上げるのかではなく、今後の日本における地域スポーツに「総合型地域スポーツクラブ」をどのように取り入れていくのかという問題であろう。言い換えれば、既存の学校施設開放など、施設面だけではない幅広い意味での「日本的」なスポーツ組織・クラブのあり方を検討していくことではないであ

うか。単純な右肩上がりの直線ではなく、何度も失敗を繰り返し、苦しい経験をしながらも、組織としてそれを乗り越えていくことの実践例の1つを「愛好会」が示してくれているのではないかと考える。

本研究では「会報」や「愛好会だより」などの資料やインタビューという方法を用いて調査を行った。そのため、役員を含めた主要メンバーからの視点が強いことが予想される。その意味で、今回のような「愛好会」全体をとらえる視点とは別に、各サークル・各会員の活動状況等をもう少し詳しく見ていくことも重要であると考えられ、これは今後の課題としたい。

## 5. 謝 辞

今回の資料収集やインタビュー調査にあたっては、度重なる訪問にもかかわらず、「愛好会」の方々には大変丁寧にご対応いただいた。元会長の前田恒子さん、現会長の田中理恵子さんをはじめ、ご協力いただいた役員の方々、社会体育研究会主宰の御塚隆満さんにこの場を借りてお礼を申し上げたい。

## 注 記

- 1) 文部科学省:「スポーツ振興基本計画」2000年。
- 2) 清水紀宏:「日本のスポーツシステムと総合型地域スポーツクラブ」『日本体育学会第50回記念大会特別委員会編 21世紀と体育・スポーツ科学の発展』第1巻, 杏林書院2000年 p. 134。
- 3) 同上 p. 134。
- 4) 清水紀宏:「街づくりとスポーツ」『文部時報』, 1474, 1999年 p. 25。
- 5) 連沼良造:「実践コミュニティ・スポーツー垂水スポーツ・クラブ20年の軌跡ー」大修館書店1992年。
- 6) 八代 勉・向陽スポーツ文化クラブ:「コミュニティ・クラブと社会的ネットワークー向陽スポーツ文化クラブの20年ー」不昧堂出版1996年。
- 7) 森川貞夫(編著):「必携地域スポーツ活動入門」大修館書店1988年 p. 69-74。
- 8) 厨 義弘・大谷善博(編著):「地域スポーツの創造と展開ー福岡市からの提言」大修館書店1990年 p. 98-101。
- 9) 佐藤郁哉:「フィールドワークの技法」新曜社2002年。
- 10) 遠藤大哉・森川貞夫:「アンケートによる地

域スポーツクラブ運営・活動評価の妥当性に関する研究」『東京体育学研究』1994年度報告 p. 77-82。

- 11) 伊藤恵造, 他:「『スポーツ・フォア・オール』政策の比較研究ーその3 総合型地域スポーツクラブの実証的研究ー福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学体育研究所雑誌』第28巻第1号, 2002 p. 85-101。
- 12) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 9, 1981 p. 67-68。
- 13) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 29, 2001 p. 17。
- 14) 福岡市主婦卓球愛好会『和と輪』2001創立30周年記念誌 2001 p. 10。
- 15) 同上 p. 10。
- 16) 同上 p. 23。
- 17) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 19, 1991 p. 15。
- 18) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 13, 1974 p. 2。
- 19) 田中理恵子「公民館サークル活動と公民館」『月刊社会教育』2000.6 p. 19。
- 20) 「異質ラバー規制」とは、「日本卓球協会が平成5年4月より、ホープス以下(小学生以下), 並びにレディースを含む年齢別種目には、粒高ラバー及びアンチ系ラバーの使用はできないとしたもの」と、愛好会会報(会報福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 25, 1997 p. 51)には記されている。
- 21) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 25, 1997 p. 51。
- 22) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』No. 16, p. 20-22。
- 23) 芝の会『芝』第1号, 1985 p. 1。
- 24) 田中理恵子「公民館サークル活動と公民館」『月刊社会教育』2000.6 p. 19。
- 25) 芝の会『芝』第1号, 1985 p. 2。
- 26) 社会体育指導者研究会「主婦として女としての地域に根ざすスポーツ活動 福岡市主婦卓球愛好会の歩みからーその1」『体育科教育』1985.7 p. 53。
- 27)~31) 同上 p. 53。
- 32) やろう会『白熱』1998年度やろう会夏合宿「まとめ」&「記録集」1999 p. 42。
- 33) 福岡市主婦卓球愛好会『和と輪』2001創立30周年記念誌 2001 p. 11。
- 34) 福岡市主婦卓球愛好会『会報 10周年記念特集号』第9号 1981 p. 31。
- 35) 現会長田中さんへのインタビューから2002.8.11 愛好会事務所にて。
- 36) 福岡市主婦卓球愛好会『会報』第19号, 1991 p. 11。

- 37) 社会体育指導者研究会「主婦として女としての地域に根ざすスポーツ活動 福岡市主婦卓球愛好会の歩みから—その2」『体育科教育』1985.9 p. 58.
- 38) 伊藤恵造, 他:『『スポーツ・フォア・オール』政策の比較研究—その3 総合型地域スポーツクラブの実証的研究—福岡市主婦卓球愛好会の事例』『日本体育大学体育研究所雑誌』第28巻第1号, 2002年 p. 63-101.
- 39) 前掲 注26) p. 50.
- 40) 田岡鎮雄「さいはての社会教育」p. 326.
- 41)~43) 同上 p. 326.
- 44) 同上 p. 327.
- 45) 前掲 注24) p. 53.
- 46) 前掲 田岡 p. 326.
- 47) 前掲 29 p. 59.
- 48) 前掲 37 p. 58.
- 49) 前掲 注3) p. 25.
- 50) 森川貞夫「コミュニティスポーツ論の再検証」『体育学研究』47, 2002年 398-399.
- 4) 清水紀宏: 街づくりとスポーツ. 『文部時報』, 1474, 1999年 p. 22-25.
- 5) 福岡市主婦卓球愛好会:『会報』No. 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10; 記念特集号, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 19, 20, 21, 22, 23, 25, 26, 28, 29.
- 6) 福岡市主婦卓球愛好会:『和と輪』創立30周年記念誌(2001).
- 7) 福岡市主婦卓球愛好会:『愛好会だより』1~19号, 21号, 22号, 26号, 31号.
- 8) 社会体育指導者研究会:「主婦として女としての地域に根ざすスポーツ活動 福岡市主婦卓球愛好会の歩みから—その1」『体育科教育』1985年7月号 p. 50-53.
- 9) 社会体育指導者研究会:「主婦として女としての地域に根ざすスポーツ活動 福岡市主婦卓球愛好会の歩みから—その2」『体育科教育』1985年9月号 p. 56-59.
- 10) 厨 義弘・大谷善博(編著):「地域スポーツの創造と展開—福岡市からの提言」大修館書店1990年.
- 11) 森川貞夫(編著):「社会体育のすすめ方」総合労働研究所1980年.
- 12) 森川貞夫(編著):「必携地域スポーツ活動入門」大修館書店1988年.
- 13) やろう会:『白熱』1998年度やろう会夏合宿「まとめ」&「記録集」. 1999年 p. 39-71.
- 14) 福岡市教育委員会:『社会体育の概要』1995~2000年度版.
- 15) 福岡県体育協会編:「福岡県体育協会史」1976年.
- 16) 福岡県体育協会編:「福岡県体育協会50年史」1997年.
- 17) 田岡鎮雄:「さいはての社会教育」1988年.

#### 参考文献

- 1) 伊藤恵造, 他:『『スポーツ・フォア・オール』政策の比較研究—その3 総合型地域スポーツクラブの実証的研究—福岡市主婦卓球愛好会の事例』『日本体育大学体育研究所雑誌』, 28(1), 2002年 p. 63-101.
- 2) 森川貞夫: コミュニティスポーツ論の再検証. 『体育学研究』, 47, 2002年 p. 395-404.
- 3) 清水紀宏:「日本のスポーツシステムと総合型地域スポーツクラブ」. 『日本体育学会第50回記念大会特別委員会編 21世紀と体育・スポーツ科学の発展』第1巻, 杏林書院, 2002年 p. 131-137.